

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十四年四月二十八日運輸省特別授承認領誌第三五二號
昭和二十五年十一月一日發行

第十六卷

第十一號

浄土

十一月號

菊のかをるころ

吉田絃二郎

楽しいわが家

村田嘉久子

一枚起請文

藤井實應

阿彌陀佛

大野法道

1950

11

合掌

生れてまだ一度も合掌したことがない、という人は恐らく少ないだろうと思う。しかしその反面、眞に合掌の心を知り、その心をもつて合掌している人も、また多くはないのではなからうか。

右ほとけ、左衆生と拜む手の

うちぞゆかしき南無のひと聲

という古歌は、端的に合掌の心を教えてくれる。佛の世界と、衆生の世界、右と左に象徴されたその手を合せることは、佛凡一體の心を現わしている。しかし、左右の手をたゞ合せることは、それをどういふ風に意味づけようと、一種の形式に過ぎないといわれるかも知れない。たしかに手を合せること、その形だけで言えば。そこに、この両手を合せることの宗教的生命を、活きた意味を與えるものが「うちぞゆかしき南無の一聲」である。南無——即ち歸依の心がそこに働いて、合掌は、合掌となつて活きくる。

己の至らなさ、はかなさに氣付いて、己を空しくして頭を下げきつたときに、天地大と一枚の境地が開けてくる。合掌の世界が活きてくる。「一文不知の愚鈍の身になして、——たゞ一向に念佛すべし」との法然上人の御遺訓はそのことを明らかにされているものであり、まことに生きゆく唯一の道を示されたものである。

目次

阿彌陀佛……………大野法道(21)

歌の念佛……………佐藤諦叡(8)

古さと新しさ……………伊藤辰造(16)

菊のかをるころ……………吉田絃二郎(1)

楽しいわが家……………村田嘉久子(10)

仙台遊記……………竹中信常(13)

一枚起請文……………藤井實應(5)

芝園たより



菊のかをるところ

吉田 絃二郎

八月三十日の朝信州沓掛の山荘で、今年初めてのひたきの聲を聞いたが、東京にかへつて来て、九月三十日の朝、武蔵野のひたきの鳴く音を聞いた。

沓掛の山荘をめぐる落葉松や胡桃の木には終日懸巢の群が鳴いてゐたが、このころ武蔵野にも懸巢が群をなし、飛んでゐる。

ひたきにしろ懸巢にしろ、信濃の高原あたりで鳴いてゐたのかと思ふと、一しほなつかしいものがある。

今年も朝ごとに庭の辛夷の赤い實をたづねて渡り鳥の群がやつて来るころとなつた。

一年のうち一番はつきりと、一番しみじみと季節の移りかはりを感じさせるのもこのころである。

小鳥の生態を見てゐると、小鳥たちは時の寒暖に随つ

て鳴きもし、音を入れもする。

わたくしの過去三十餘年間の俳句を集めてくれた友人が「お前の句は春夏のものは少くて、秋冬が多く、殊に秋の句が一番多い」と言つたことがあつた。この三十餘年の間にわたくしが作つた句は約四百であるが、内二百數十句は秋のものである。

何故に秋の句が多いのか？ いふまでもなく秋は澄心の季節であるからであらう。春が来て雪が解け初むれば小鳥が囀るやうに、秋が来て空も澄むころになれば人間の心もおのづからものゝあはれを感じるほどの落ちつきを見出す。西行法師ならずとも秋の夕暮れの旅をゆけば、鳴立つ澤のあはれを感じるにちがひない。

わたくしたちは小鳥などとちがつて、自主的な生活を

したり、自主的なものゝ考へ方をしてゐるやうに思つてゐるが、實際は小鳥たちが季節に随つて生態を變へてゆくやうに、人間も亦季節に随ひ、環境につれてものゝ考へ方、感じ方を變へてゆく。

かういふ意味で、秋はわたくしたちにとりて、最もありがたい、尊い季節である。秋の風を聴く刹那わたくしたちの、ものゝ考へ方は一層哲學的となり、宗教的となる。

芭蕉に

菊の香や奈良には古き佛たち

といふ句があるが、いつも秋になれば思ひ出さるゝ句である。芭蕉も菊薫るころの奈良を訪れて、しみじみと古い佛たちの寂然たる御姿を尊くをがむだことであらう。

しみじみと佛さまを拜むといふことは大事なことである。いろいろな宗教や哲學などの理窟を絶した靜觀の境に於いて佛神に觸れる大歡喜といふものは容易に味ひ得られないにしても、わたくしたち下根の身にも、このしみじみとした心持で佛さまを仰ぎ、古い佛さまを拜むことだけはゆるされてゐる。

かつて綱島梁川は「われ神を見たり」といつて當時のわが思想界に波紋を巻き起した。批評家たちは「梁川の

白晝夢」として一笑に附した。しかし幾十年後の今日批評家たちの冷たい雜音は消え去つて「われ神を見たり」といふ梁川の信仰の叫び聲のみが、わたくしたちの耳に残つてゐるのは何故であらう。

接神接佛の經驗は容易なことでは得られまい。しかししみじみと佛さまのことを思ひ、人生を觀じ、しみじみと奈良の古き佛たちを拜むことは凡夫にもゆるされる。

菊のかをるころ、渡り鳥の鳴きつれて飛ぶころ、茶の花の咲くころ、時雨降るころ、しみじみとした氣分で佛さまの前に坐ることが、ありがたい宗教生活といふものではあるまいか。

渡邊崋山が幕府の忌諱に觸れて、天保八年、藩の同役の許まで退役願を出したをりのことである。崋山は政治の致し方を畫家の繪を描くをりのたしなみになぞらへて述べてゐるが、繪を書くにもその態度がいかに眞剣であつたかがうかゞはれる。

「唯繪事にて推謀り存候に、繪事すら第一の心と申すものに、志一途に立不申候ては、物の形の調ひ候て、落なく見事には出來不申候。又、心ばかりやたけに存込候て、手も又心の通に動き不申ては、畫なり不申候。胴體

四肢治り不申候ては、机に向ひ腹より溢れ出候様に存込不申ては出来不申候。依之惣身の内、髪の方、爪の端迄皆畫に相成候様仕る事にて候。素人より申せば、爪先髪毛の、畫に用は無之と可被存候得共、髪を結びて快然と相成、爪を取て手をキレイに不仕候では、繪の具をこなし候ことも出来不申候。己に古人も明窓淨几は書の合、風雨擾雜は書の乖と申、身外のものすら如此、まして惣身の内猶更に御座候。云々……」

字を書くには先づ明窓淨几の環境を整へなければならず、繪を書くには爪を剪つて綺麗にし、一筋のほつれ毛もないやうに髪を結び上げ惣身の精根を盡して、かゝらなければならぬといふのである。落ちつきのない風雨擾雜は書に反くものであるといふのである。

華山の繪を書く刹那の心の持ち方は、またしみじみと佛さまに對座し、しみじみと佛さまを思ふ刹那のわたくしたちの心と通ふ。

無心にして繪を書き、三昧に入る心境はしみじみと佛を思ふ心である。

時は秋である。風雨擾雜の季節は過ぎて、靜觀の深秋である。

愚案するに冥途もかくや秋の暮

(芭蕉)

芭蕉ならずとも、佛の世界を現前に觀する季節である。

二三月前の新聞に、靜岡縣富士宮市の中學生たちの記事がかゝげられてあつた。生徒たちは川原の小石を校庭に運ぶ作業をやつてゐたが、たまたま遠くからしきりに悲壯な鳴き方をする犬の聲を聞き、聲をたよりに川原を歩いて行つた。そこには三四十頭の犬が檻の中に放りこまれてゐた。野犬狩りにかゝつた犬たちで、見るからに瘠せ衰へてゐた。犬は生徒たちの姿を見ると救ひをもとめて、一層哀願するやうに悲痛な聲を絞つて鳴いた。生徒たちは小屋を叩き壊して、犬たちを解放してやつた。事件は警察沙汰になつたが、何んな裁決になつたか、それはわからない。

神佛の眼から見て、無慈悲なことを大人たちは平氣でやつてゐる。子供たちは神佛の眼を以つて、ものを觀、ものを感じる。大人たちはかれ等を責める前に、自分たちの懈怠を責めなければならぬ。

「十月五日庭の山茶花咲き、木犀かをり、今日もひたき啼く……」とわたくしは日誌に書いた。今年も生きてま

た秋を見ることを思ふだけでも胸はをどる。

木犀のかをるころになれば思ひ出すことがある。大正九年のころであつた。わたくしは中根岸から瀧の川に引越して行つた。

或る日、わたくしは妻に一圓の金を貰つて、風呂敷を抱へて飛鳥山を下つて、王子まで二舛の米を買ひに出かけて行つた。わたくしは扇屋といふ料理屋の手前で、木犀の苗木を賣つてゐる男を見た。わたくしは米を買ふ筈であつた金で木犀の苗木を購めてかへり、庭に植えた。

木犀は年々に大きくなり、やがて秋が来る毎に室内まで幽かな薫りを漂はすやうになつた。

今でもわたくしは時として二舛の米と代へた木犀のことを思ひ、あのころの生活を懷ふ。

わたくしは學生時代から幾年も、椅子に腰掛けて本を讀みたいと思つてゐた。その多年の念願が叶つて一脚の眩掛け椅子を買ふことができたをりの嬉しさは今でも忘れない。

ウェブスターの大英辭典を欲しいと思つたのも數年の間のことであつた。その希望が達せられた時、わたくしは子供のやうになつて、終日大辭典のページをめくつてよろこんだ。

わたくしは妻のために一筋の晝夜帯を購めてやることのできた。妻は小娘のやうになつてよろこんでくれた。

わたくしは庭の眞白な山茶花の下に椅子を持ち出してウェブスターの大辭典をひもどいた。

今になつて考へるとあのころは幸福であつた。

今日もわたくしは山茶花の下に椅子を持ち出して、午後の日の光りを浴びてゐる。

梢にはひたきが鳴き、あをいといが啼いてゐる。

わたくしは靜かに瞑黙して三十餘年の昔の瀧の川時代を想ふ。

かつてわたくしを狂喜させた眩掛け椅子はいつか賣られてしまひ、大辭典は埃を浴びて書齋の片隅に忘れられ、妻は伊豆の山に眠つてゐる。

わたくしは孤獨の感に胸打たるゝこともある。

しかし數年の後になつて振りかへれば、今日の生活も亦、幸福にめぐまれたものであらう。



一枚起請文

藤井實應

法然上人の御遺訓、一枚起請文は、上人のみ教を仰ぎ信じている念佛門の人々によつて、朝夕拜誦されてゐます。

そしてそのみ教によつて念佛が勵まれているのであります。念佛の末流はいうまでもなく、念佛門以外の人々、天台・眞言・禪等諸宗の高僧方もこの一枚起請文を尊崇し、その解釋の書物も書いてをられるのであります。彼の一休禪師が「法然活き如來、一枚起請奇なる哉」と讃歎してをられるように、各宗の人々からも尊重されるわけは、この御遺訓は淨土念佛の骨髓を示されたものであります。まことにこれはまた諸宗の精髓であるからであります。まことにこの御遺訓は、今日のわれら念佛教徒の龜鑑であるのみならずとこしえに闇路を照す法の燈であります。

(5) 建曆二年(西紀一二二二)正月二十三日、法然上人は御齡八十歳にて、もはや御臨終の期も近いといふので、門弟信者等が憂ひ悲しみの中に御看病申上げていた時、永年上

人に隨待し御仕へしてをられた勢觀房源智上人は、衰へ給ひし師の御房の御姿に涙も止めえず。枕頭に近づいて「御師様、念佛のみおしえは永年御教誠にあづかつてをるのであります。なほ、御自筆に肝要の點をひと筆お書き頂きまして、のちの御かたみにそなえとう存じます。」と懇願いたしました。いたわしき師の御身、御苦痛は承知の上であるが、これも正法大切との勢觀房の誠心に外ならなかつたのであります。上人は重い頭をあげて勢觀房の志を嘉し、一期の正義を、つゞめて一枚の紙に、一氣呵成に筆を染めたもうた。それが世に名高い一枚起請文であります。實に御入滅(正月二十五日)の前二日の二十三日のことでありました。實にこの文こそ上人八十年の深い御體驗の結論を示されたものであり、その御遺訓を靜かに拜讀いたしますれば、誠に誰が爲に遺され、誰が爲に起請誓言までせられたかと思ふと、それは、ひとへに今日苦惱にあえぐ私の爲であつたと氣づかせられて、感極まるを覺えるの

一枚起請文

もろこし我かてうにもろ／＼の智者達のさたし申るゝ觀念の念にも非す又學文をして念の心を悟りて申念佛にも非すたゝ往生極樂のためには南無阿彌陀佛と申て疑なく往生するぞと思とりて申外には別の子さい候はす。但三心四修と申事の候は皆決定して南無阿彌陀佛にて往生するぞと思内に籠り候なり此ほかにおくふかき事を存せは二尊のあはれみにはつれ本願にもれ候へし念佛を信せん人はたとひ一代の法を能々學すとも一文不知の愚とんの身になして尼入道の無ちのともからに同してちしやのふるまひをせずして只一こうに念佛すへし。

爲證以兩手印

淨土宗の安心起行此一紙に至極せり源空が所存此外に全く別義を存せず滅後の邪義をふせかかんか爲めに所存を記し畢

建曆二年正月二十三日

源空在判

であります。

釋尊滅後の日本の釋尊と仰ぎまするわが法然上人は、その當時のあらゆる階層の人々、上は天皇公卿の人々から、武士百姓町人漁人強盜遊女の人々に至るまで悉く法雨をそゝがれ教化したもうたのでありまして、その當時から、彌陀如來の應現、勢至菩薩の權化と崇められました。實に日本に釋尊である上人の御遺訓がこの一枚起請文であります。教を仰ぎ信する者は、朝に讀み、暮に拜し、骨にちりばめ、膽に銘じて祖恩に報すべく念佛を勵むべきであります。

この御遺訓は上人生涯の結論であります。しかしその時はじめて述べられた教といふ意ではありません。先に聖光上人にも同じ意を付屬し給ふてをられるのであり、平生からの御法語で、それを末期にまとめて御書き遺し下されたものであります。

何故に一枚起請文と申しているかという、一枚の紙に御認めになつた短い文であるので一紙といふ、起請とは、本文の中に「此ほかにおくふかき事を存せは二尊のあはれみにはづれ本願にもれ候べし」とあつて法然上人御自ら釋迦と彌陀の二尊のみ前に「此外に何も奥深いことはない」と御誓ひになつてゐるから起請文といふのであります。

かように二尊のみ前に御誓ひになつて淨土宗の心のすえ方(安心)も、ひとすじのつとめ(起行)もこの一紙にこ

もつていと示されてをります。上人の代表的な著作である『選擇本願念佛集』は十六章段に分ち、淨土三部經をはじめ、善導大師の四部八卷の書物の要文や、曇鸞、道綽、懷感等淨土列祖の釋文を廣く載せて、上人の主唱せられる念佛を明にせられたものであります。それで上人の念佛のみ教は、ひろげると、その選擇集、すぼめるとこの一枚起請文となると義山上人も申してをられます。すぼめたからとて切つて捨てたものではありません。すぼめて小さくする中にみなこともつてゐるわけです。それゆゑ、開きたてゝ廣くいえば二百座、三百座と講座を重ねても盡きぬほどであるが、縮めていへば一口にてらちがあくのであります。こゝは縮めて合點するが一枚起請文のこゝろであります。元祖法然上人の廣い智慧にて縮めて申されたものであるから讀むにも縮めて讀み、領解するにも縮めて領解するがよいのであります。この心もちで、この御遺訓を拜したいと思ひます。

一丈の堀を越えんと思はん人は、
一丈五尺を越えんと勵むべし。

往生を期せん人は

決定の信をとりて相勵むべきなり

(勅修御傳)

口の運動

名優團十郎は、舞台にのぼる五分前になると、鏡にむかつて、口を大きくあけたり、すぼめたり、色々の形を試みるのを、毎回のならわしとしていた。

或人が不思議に思つて、そのわけをきいてみると、彼はこう答えた。

「樂屋にゐる間黙つていて、そのまま舞台に上つて、直ぐにセリフにかかつて、決して本當の聲は出ない。しばらく言つてゐる内にやつと調子が出て來るのだが、それではまづい。口を切つた瞬間から、本調子で行かねばならない。それには、いつ口を開いてもよいように、口の筋肉のしこりをほぐしておくことが大切だ」……

一見何でもないことにも、人知れぬ苦心と準備とが必要である。萬全の心構えと身構が出來てこそ、はじめて物事は順調にすべり出すのである。

作らずにおいて悔むな今日の菊

虚白

まことに、平常用心の念佛があつてこそ、往生極樂が待たれるのである。死の手に掴まれてから、その苦しみの悲鳴の念佛ではなく、せめて、團十郎の心奥しい用心をまねて、いとおむかいが來ても、少しもさわぐことなく、正念し得る丈けの、口の運動を身につけておきたいものである。

歌の念佛

歌の念佛は山形縣西村山郡西里村方面で古くから歌われている歌である。この地方は草履を作ることを業とする家が多く、農業の暇の期節や夜などは、若い者も老人もこの歌念佛を節をつけて歌いながら、草履を作るのである。節は佐渡おけさでもドドイツでも何でもよいが、素朴な單調な節廻しで歌うことが多い。こゝに集めた十一種は古くから土地で歌われているものを、古老に聞いて記録したのであるが、新に拙作數種を加えて御批判を願うことにした。新しい拙作も土地の人達に歌ってもらっている。

佐藤諦叡

寺へ寺へと嫁孫つれて

彌陀のおそばで法のりをきく

歌をうたうならお寺さんでうたえ

ほとけ笑顔で見てござる

いちに念佛二に寺詣り

さんで三尊有難い

願え願えや我らがほとけ

大慈大悲のありがたさ

ながい浮世に短い生命いのち

所たのきらわす彌陀頼め

重い罪でもほとけさま許す

二度としまいとお念佛

おらがほとけ様誓ひは重い

娑婆の衆生をみな救う

うちの阿彌陀さまあらたなほとけ

一度ねがえば罪消える

なにを言うても阿彌陀さま大事

この世そのまゝ彌陀世界

彌陀の本願めぐみは深い

この世そのまゝお淨土に

おどりおどるなら念佛でおどれ

おどる心は彌陀ごゝろ



法の光に罪業消えて

心ゆたかにお念佛

歌は下手でも念佛上手

からだそのまゝほとけ様

欲に染まれる凡夫の心

念佛ひとつで清くなる

からだほとけで家庭は淨土

鬼や地獄はわしやきらい

悪の世界を淨土にするにや

早くとなえろお念佛

彌陀の極樂われらが世界

六道輪廻はのがれたい

歌と念佛この世に無けりや

胸の蓮華がいつ開く



楽しいわが家

村田 嘉久子

この春ごろ例の婦人の時間中の連続放送、ホームドラマの「楽しいわが家」も早いもので二百回間近になり、丁度一週年を迎えるに際して、私の役—お祖母ちゃんのおとめさんが孫の健二、順子の二人を連れて、田舎の親類へ出かける、という場面がありました。

田舎の親類では、大勢の人たちが集まつて、御佛間にお供物などして、内々の御法事を営むというわけでしたが、あいにく村のお寺のお坊さんは、遠くのお檀家へ呼ばれて行つて、まだ戻つて来ないので間に合わず、大騒ぎをするところがあります。仕方がないので親類の誰れか下手なお經をモグ／＼あげているところへ、おとめさんが孫をつれてやつと馳けつけるのですが、偶然にもこのお祖母さんのおとめさんが、お經の少し位は上げられる人になつていて、早速大勢の親類たちに前の方押し出されて、一ぱし坊さん振つて、「願我身淨如香爐……」を、聲高らかに唱えることになるのです。

並居る親類の人たちは、このおとめさんの御經を仰山に推賞して、何かと持ち上げるので、お祖母さんすつかり喜んで、一心不亂に讀經をつゞけるのでした。私はその時マイクを通じてお經を讀むのは初めてですし、もちろん素人のお祖母さんがお經を上げるのですから、上手も下手ありません。たゞ一生懸命にそれらしくさへ唱えればよいのですが

如是寸言

ホールドアップには必らず覆面とピストルがつき物である。ところが、近頃では平氣で素面で堂々とやる。尤もいくら見られてもブスリとやつちまえばいいのだといえばそれまで。だがそれでは盜棒道にはかなうまい。

日大事件の山際など、同道の車中で、而も同僚を平氣で傷けるとはその頭を疑いたい。いくら明日の日にも原子爆弾が破裂するかも知れぬとはいえ、破裂しなくて済んだらどうなる。明日の事だけを考へていると、十年生きたる生命も、明日で終つてしまうことになるだろう。

神様が創つた時間は二十四時間しかない。が今は既に二十五時だ。神様の手もとからはみ出して、神様と関係のない時間に生きていくのだ。じや一體どうしたらいいんだ。ルーマニアの作家ゲオルギューはその小説「二十五時」の中でそう質問した。

キリスト教は不便である。ゲオルギューが佛教徒だつたら、もつと明るい方向に進めた

その何んでもないことの、その場にのぞんでハタと當惑したのです。

それは、少しでもうまく上げようすると、祖母役としての、役の性根が違つてまいりますし、またあまりひどく下手ですと、聴取者の中には種々の人がいますから「嘉久子も佛へ手を合わす位の人なのに、なんて變な聲を出してお經を上げるんだらう……」なんて言われるかも知れません。そのところ、私は本當に當惑いたしました。

もと／＼加行の時、ほんの一寸の期間だけ、その頃の法務部長の山本諦承先生からお經を教えて頂いただけでしたから、私としても下手なのは自分でよく解つて居りますが、たゞ嘉久子がお經を上げるのではなくて、このドラマの場合、おとめ祖母さんが上げるお經なのですから、そこに役としてのむづかしさがある譯でございます。

ところでその時、放送局内ではその親類になる大勢の俳優の方々は、皆私が貸してあげた「淨土宗日常勤行式」というお經本を手に手に、私の指導で「願我身淨……」を稽古することになりました。

スタジオ内は急にお寺と早變りした有様で、あつちでもこつちでも「願我身淨……」が始まりました。お誦ひみたいな方もあれば、安來節のような聲もあり、聲樂できたえた聲もあるというわけで、實に和んだ面白さでした。あつちの隅、こつちの隅で練習している方たちを眺めながら、私は何とも言えない嬉しい氣持になりました。

そればかりでなく、ドラマの筋はそこのおとめさんがあまり「願我身淨……」を大聲で唱えるので、傍にくつついている順子という六歳になる孫が、早くも覚え込んでしまつて、折柄遅い初午のような祭りが村にあつて、そこで子供たちが大勢、男の子も女の子も集つてドンドコ／＼太鼓を叩きながら遊んでいる場面になるのですが、はからずも順子が東京から來た子供だということで人氣者になつてしまつて、すべて順子が先に立つていろ／＼の

であらうに。

人間はたえず賭をする。一台の電車にのるのも賭である。一步遅れたために乗り遅れたそのおかげで脱線轉覆して死ぬのを免れることもある。競輪も賭である。穴をねらうのは賭の中の賭である。最も華かな賭である。その賭が八百長で崩されたのでは、柵もこわすだらうし、切符賣場をひつかえしたくもなるだらう。然し、競輪狂の風態をみてみると、何だか彼等の賭の對象がレースの勝負にあるのではなくて、選手をなぐつたり、賣溜金をかつ拂つたり、火をつけたりすることにあるような氣がする。

頭から競輪を禁止する前に、何かに賭ねばいられぬような人種の心理を、ぢつくりと研究してみる必要がある。

二十五時で時間が問題になつたが、もう一つ「天國への階段」という映畫でも時間が問題になつている。天國には時間がないという。これは至極厄介なことになる。時間がなければ何も出來なくなつてしまふ。凡ゆるも

遊びをやつてゐるうちに、その順子がなんと男の子、女の子の先頭になつて「願我身淨如香爐……」と歌のようにやり出すのです。この光景は、何とも言えず尊くそして可愛らしい感じがしました。

私はこの孫の順子役になる八歳の中島修子さんというお子さんに附切りで「願我身淨……」を一生懸命教えこみました。

僅かの時間でしたが、子供さんの物覚えのよいのには驚くほどで感心させられましたけれど細い上り下りは如何にもむづかしく、またそれを真似して大勢の男女の子供が、聲を合せてついてやるのでその合間々々にお稻荷さんの太鼓がドロン／＼と入るのですから、その不思議な合唱というものはありません。吹き出したくなるのです。

スタジオの連中は、皆手を打つて喜び笑い合いました。可愛らしいのと、お經のような歌のような不思議なリズムは一種莊嚴な氣分に皆をまきこんで、私など何か眼の中がうるんで來たのを覚えております。

テストがすんで、いよいよ本番になる時、私は順子の中島修子ちゃんに口をよせたきりで「願我身淨……」を小さい聲でツケつけました。

そして無事この放送は終わりましたが、私はいつまでも面白半分「願我身淨……」を喜々として唱えている子供さん達を眺めながら、何となく有難くて思わず合掌をしたことでした。

この日は一日み佛デーといった工合で、スタジオ内は木魚の音、鐘の音、そして「願我身淨……」とで、皆和んだ氣持に包まれました。「楽しいわが家」にふさわしい清淨な有難い御因縁だとしみ／＼私は感じました。

のは停止しなければならぬ。耐らないことだ。

佛教の時間は不斷の流れに譬えられる。萬物流轉である。此點甚だ都合がいい。だが、現實はその逆である。流轉すべき佛教の河の水は少しも流れずに、溜りよどんで腐つてしまつてゐる。吾々は鼻をつまんでドブ掃除をせねばならぬ現状にある。一層佛教も無時間になつて、ドブの水をかい出してカラッポにしまおうか。

一方では追放解除、一方ではレッド・パーヂ。矢張りこれも時間のせいだ。解除されたというのは、それ丈け色合が薄くなつたからだろうし、適格審査をパスした大學教員が改めて追放されるのは、それ丈け色が濃くなつたからであらう。右が薄くなれば左が濃くなる。これはアインシュタインの相對性原理でもあるし、時が経てばまた濃くもなるし薄くもなる。とに角、政府の旗ふりは赤だ白だとおいそがしいことである。——色即是空。

仙 台 遊 記

常 信 中 竹

つつじが岡

めつきり秋めいた空の色だが、晴れた日射にはさすがに強いものが感じられて、昨年東北大學での第九回宗教學大會で歩き馴れた新寺小路の一本道を歩いていると、背中に薄く汗が湧く。所用で一日遅参して、第二日目からの顔出しなので、心なく歩む歩調も早目である。

昨年厄介をかけた盛雲寺に立寄つて、その裏道を抜けて仙台驛「つつじが岡」驛に出る。北に小高い岡を控えたその南の麓をめぐつて電車道が、大都市の周邊特有の雰圍氣を漂わした町筋を作っている。驛前を踏切つて左に折れてしばらく廣い道を行けば、突當りのこんもりとした杉の木立の間に本堂の屋根、やがて山門に立てかけられた看板がみえる。

第三十八回教化講習會、淨土宗第三回宗學大會々場と併書され、

その傍に主催者の名のならぶ看板のそばを通れば、既に會場願行寺の本堂にあふれて、熱心に聴講する人影が眺まれる。

思えば第一回京都、第二回東京、そして今度の第三回仙台と、宗學大會の歩ゆんで來た道は遠かつたが、それ丈けにその内容は多彩であり、その成果は絢爛たるものである。他の凡ゆる學會にさきがけて、いち早く戦後第一回の大會を開催し得たことは、それだけ内に力を蓄えて來ていたことと、時宜を握む才智と、實現に至らしめる熱意と力とを、淨土宗がしつかりと持つていたことを語るに外ならない。而もその先鞭をして眞に先鞭たらしめてその繼續を今日にあらしめた中央と地元との協調と熱意とは、我々道を歩む者にとつてまことに心強い。遠くは福田、黒田、以來、渡邊、小野、望月、矢吹、荻原、山口の諸先輩を持ち、今猶椎尾法主を始めとして多くの學匠を上へ頂く者として、省みていささか感なきにしもあらずではあるが、宗風未だ地に墜ちず、やがてはかつての凱世をとの望みに胸もふくらむ思いがする。

第一日（十月六日）の高島佛大學長の指導講義は残念乍ら聴き得なかつたが、第二日目の七日、正大学教授石井教道氏、東北大教授石津照爾博士の講義には、列し得た。ことに自分の専門の關係か石津博士の該博多岐にわたる論旨の展開には深い興味をそそられた。

一般研究發表も時間的な制約がなければ、いづれ劣らぬ内容と示唆を持つたものだつたが、やつと本論に入りかけたかと思われると、既に時間が切れて司會者の鈴が鳴るの恨みがあつた。いづれの學會にも通じてみられる惱みではあるが、次回からは何とか便法を講じ

て貰いたいものである。

午後五時、既に戸外には深い夕闇が漂い、黒板の字もさだかならぬまでも續けられた第二日目は、引つゞいての懇親會に於いて、場所の名も床しい「梅林」なる宿舍柄、くつろいでの談論風發に、研究討議の實があがつた。

第三日には、午前九時より正午まで、宗學大會の名に背かぬ、現淨土宗の誇る俊英の研究發表に、大會の棹尾が飾られた。

三日にわたつての大會も一應終つて、講習會終了式、證書授與もめでたくすんだ。さてこれで、とはいふものの、遠くからの人々、また地元の人々、共に分れの挨拶の長く、くりかえされるのも、仲々に相會うことのない日頃、せめて此際、よき時よき處での感あるためでもあらう。

瑞巖寺の朝

門前に立つて山内を見ていたら、はるか僧堂の戸口から、頭を綺麗に剃つて、墨染の法衣の腕を組んだ二十四五ばかりの僧が、白い太緒の朴齒をはいて出て來た。こつちへ來るのかと思つたら、杉並木の山道を半分程來てそのままついと左にそれてしまった。早朝の禪寺の、霧のうつすらと漂う中を、三抱えもある杉並木を背景にして遅ましく歩いて來る禪僧のいる風景は、何といつても墨繪的構圖である。漱石の草枕にでも出て來るものだ。そおいえば、門前の道を、地をなめるように腰をかゝめて掃いている、土産物屋の老婆の姿も決して油繪の材料にはならぬ。

そこへ、昨夜遅く仙台からやつて來て、隣りの修學旅行の騒がしさに惱まされ乍らも、やがてはこつちも負けずに騒がしくなるほどにメートルをあげて、今朝は五時というにもう起き出でた隣り部屋の少年少女達につきあつて、久しぶりの早起きをしてみたものの、頭のしんが未だ目をさましきつていないような顔付で、宿のドテラを寒そうにきて、フラフラと出て來た漂客が登場したのでは、墨繪も何もあつたものではない。同行六人、佛大の惠谷教授は他に豫定あるとて早々にして發たれた。

瑞巖寺は山門に青龍山と山號があがつており、臨濟宗妙心寺派、遠く承和五年（西曆八三八年）圓仁によつて創建されたものが、幾度かの變遷を経て、應長九年（一六〇四）伊達正宗の發願により、山内諸堂宇一切を造營し、伊達家の菩提所となつたもので、その伽藍は桃山式建築で、國寶に指定せられているものが多い。

ドテラ姿で慢然と歩むには、正面から砂まぢりの掃き清められた山道を行くのははゞかれるのか、自然と足は山門の入口から右に折れて、高い懸崖の下に掘られた岩窟の方に向く。鰻塚なる自然石の一丈位もある碑の前をすぎると、崖の下に洞窟が並ぶ。壁間は龜になつて、古いところで五輪の塔、新しいものでは様々の佛像が刻まれている。大正大學佛敎學のそうそうたる連中も、旅の疲れと寢不足のために頭が冴え切らぬのか、そこらの田舎の見物案の如くに徒らに頭をあげて感心するのみである。中には二階造りのもあり、中央の爐の跡を止めてあるものもある。恐らくはかつての昔、不惜身命の求道者が、ここに端座し、結界して懸命になつて修業したこと

であろうが、今はただ先人の住居址として、秘めて語らぬ古蹟となつてゐる。さすがの遊士連も、矢張り惻々と胸に忍ぶ共感はあると見えて、生來の諸誰も彌次も控え目にして見てまわつていたが、やがて中程まで行くと、ここもまた婆婆である。早朝誰一人いない筈の岩かげからひよつこりと現れた、五十ばかりの仲々にこすそうな目つきの男一人、いい鴨が來たとばかりに頼みもせぬ吾々の傍によつて來るや、

「えー、お早くのお越しでお疲れのことと存じます。當所は今昔人皇第何代何々天皇の御時……」とばかり喋り始めた。此聲を聞くや、折角、すつとしかけた頭と胸が再び俗塵を浴びせられて逆戻りしてしまい、肝心の本堂、僧堂への道をそれて、またもフラフラと山門の方へと戻つてしまつた。

山門を出ると、眼前に波一つなく朝日をうけて輝く海に、點々と浮ぶ島々。まことに俳聖芭蕉をして、「ああ松島や松島や」と絶句せしめる丈けの風景でこそある。しばしそのさまを見はれる視界を横切つて、四十ばかりの女が一人、天秤に水桶をさげて馴れた腰付で歩いて行つた。眼前に漫々と水をひかえつつも、永に乏しい所とみえて、山際の堀ぬき井戸まで飲料の水を汲みに行くのが土地の主婦の重い役目らしい。ふとみれば、瑞巖寺の山門の處にある井戸には既に五六人の水汲みが、今日一日の話しはじめに夢中になつていた。どうりで、昨夜、宿で酔さめの水を飲んだが頗るうまくなかつたわい、と同行の一人がいつた。矢張り松島は見物するところであつて住むところではないらしい。

仙台銀座

地方の一寸した町にいつて、一寸賑かな町筋には必らず何々銀座の名がみられる。仙台ぐらゐの市になれば、何も他所の土地の名を借りることもあるまいから、仙台銀座などといつては叱られ相である。

とに角、昨年來た時、驛前は工事中であり大學のある通りまでの間はと切れてゐた。勿論戦災都市特有のバラックはあつたが、通りすがりにもそれと氣のつくほどに、齒の抜けたような淋しさがあつた。一年経つて來てみると、まづ驛前の變つたのにまごついた。

一夕、抜け出して町を歩いてみた。一夕というときも數日間滞在したようだが、實は一夜も止まらなかつたのだからわれ乍らあきれる。同行のM氏と薄闇の驛前通りを、デパートのある、所謂銀座通りへと歩く。丁度會社商店のひけ時とみえて、人の流れが逆に驛に向く中を、左右の店を珍らしげに眺め乍ら行く姿は正に赤毛布である。

東北隨一を誇る丈けに、戦災を受けたとはいへ、その痕は早くも癒え、表通りの見たところは夜目でもあるが堂々たる町筋である。たゞ所々に、ショーウィンドに「こけし人形」を並べた土産物屋のあるのに、いささか観光都市の匂いがする。

町を歩いて何よりも目につくのは國警豫備隊員の姿だ。カーキ色のユニホームに白い開襟の、いづれも若さを漲らした隊員を三々五々と、いたるところに見受ける。東京では殆んど未だみられぬ丈け(十九頁へつゞく)

古さと新しさ

伊藤辰造

紅葉も愈々深まり、幾たびかの霜の訪れ、やがてカサ／＼と木枯の持ちくる音を襟元に聞く晨が惻々として面に迫る想ひも一しほに、何がなし心のせわしさを覚えさせられる今日このごろであります。

秋晴れの一日、都塵を避けて聖園に杖引く人々の目にうつる其れはまた、霜更も物かわ額に汗して村人達が田畑に收穫・耕耘・播種、さては調整・貯蔵等々々と此處を先途の八面六臂で凡そ「手」の付くものなら猫の手はおろか、まごのて……自分の背中を掻くときに用ひる棒状の先へ手の形がついた竹製のもの……から果ては茶繻の手までも借りたという、目の廻る様な「忙がしさ」の増埒でありましよう。

この様な、仕事以外のことは何を考へる暇も無い、たゞ「忙殺」の一言に盡きる自然と人爲の営みの内にも、少しく想ひを廻らせば私共に教え諭してくれる數々のものが在ることに心付くのではない

でしうか。

年々歳々物を作つてはとりいれ、收穫しては種を播く。一見なんの變哲も無いことの様に思はれますが實は、常にその品種の改良、耕作栽培技術と調整貯蔵から私共の口に入るまでいつたる運用管理の改善のために、機まざる研究と實踐が、私共の目の届かない戦ひとして、我々食生活の安全確保を目指し、それ／＼の人方の並々ならぬ勞苦によつて黙々と行ひ續けられ、そして新品種・新耕法・新技術が謂ゆる「新しい」ものとして次々に生み出されてゐるのであります。

そこで此の何等變哲も無いと思はれる所の「新しい」ものゝこと、「生み出す」と謂ふことの考へ方のつなかりは、一つ耕作の事だけのものでは無く凡そ世上百般、總ゆる「事」に通ずるものでありまして、この考へ方が人によつては千差萬別、様々な姿となつて時代の上に現はれ、所謂「娑婆」なり「世相」と云ふ其の時々の社會世間の在りかた形で次代を造る土臺となり、私共の歴史が織りなされて行きます。

こうした此の歴史の影響と人々の環境立場との結ばれによつて、それ／＼世間に對するいろ／＼の見方が、即ち人世觀なり處世觀として世代に反影し、これが巡環的・相關的に繰り返へされて永い永い人の世界が運ばれても來、また運ばれて行くことでありましようから丁度、耕作の事と同じ様な遷り變りを見いだすことが出來ます。

この様にいろいろの事柄が本質的に向上進歩の内容を持つて繰り返へされることは「新しい」ものを生んで行く事でありすが此の新しさと云ふものは、古いものとは全然かゝわりの無い、突然どこからか飛び出した様な「新しい」ものゝ新しさでは無いのであります。……あたかも新品種が古い品種の交配によつて生み出される様に……。

例へば藝術家でありますが、永年にわたる幾百の試み、幾千の制作によつて眞摯な精進と研鑽を重ね、遂にその藝術の上に薫り高い一つの立派な性格と思想と洗練された技術が築き上げられ、そして鋭敏な感覚と豊かな構想力を自在に使驅し、次々に一貫した特長を持つた作品を「生み出す」と同時により良い内容を益々盛り上げて行く、此の新しさであります。

又、蒲焼の老舗が用ひるあの「たれ」。これは恐らく格別の事が無い限り今でも創業當初からのものを使つてゐることゝ思ひますが、この「たれ」は古いほど良いとされてゐるものでして、それはどういふ譯かと申しますと、これを使ふ度ごとにか毎日に減つただけつゝ次々と新しい「たれ」を足して行くことによつて昨日よりは今日、今日よりは又明日と常にあらたな鰻の焼汁と調味料の香りが加わりながら古さを増し、次第に熟成された（なれた）鹹味の軟かさが、蒲焼を賞味する人々の舌の上になんどりとした味ひを乗せせて充分に味覺を樂しませてくれますからでありまして、此の古きものゝ新しさであります。

それから又、我が學界で私共日本人が世界的に最も誇りとする科

學者湯川秀樹博士の、中間子理論による「ノーベル賞」受賞の輝かしい功績にいたしましても、博士自身各地の講演會でのお話しの内に、自分丈の力では無くて過去の碩學先輩の成された業績が在つてのことであると謂ふ意味合を充分に含んで餘りある言葉として大略「今日の若き科學者と青年學徒達は、私の研究業績を踏み臺とし又これを踏み越えてより良き貢獻を社會人類の幸福のために盡されんことを望んで止まない」といつたことを申されて居りますが、この事實は最も單的に「新しい」ことに對する具體的な解明を與へられた大きなものゝ一つであります。

これ等のことゝ一脈相通じます古諺に「古き革囊に新しい酒を盛る」と云ふ言葉がありますが、この言葉の持つ意味を「古臭いものに新しいものを入れて見た所で、切角の新しいものが只古臭くされるばかりで何んにもならぬ無駄なことだ」と云ふ風に多くの場合用ひられてゐる様でありますが、正しい解釋は元より左様でありましたようけれ共然し私は、この様な意味にだけ此の言葉を用ひたくないのであります。

曩ろ之れとは逆に、「古いものへ、常に新しいものを注ぐことによつて新鮮味を加へ古きものゝ意義……價值……を増し、又古きものゝ價值を攝り入れて、新しきもの自體のより深くして大きな力を成す」と云ふ意味に採り上げて、今日の様な世の中に在つては尙更のこと、少なくとも退嬰的・頽廢的な感覺をこそ退け、發展的・建設的な意慾・考へ方を助け伸ばすことに役立たせることが望ましいのであります。……「新しい」ものゝためにも、次代を背負ふ人々の

ためにも……。

斯くいたしました「新しい」ものはいづれも、日々に古び（時間的に）と新鮮味（内容的・價值的に）とを加へ入れつゝ、常にあらたな世界を築いて行く生きた新しさを持たなければなりませんので今日忽然として現はれ明日は既に雲散霧消して影も形も無い様な、これも例へれば終戦このかた矢鱈に云ひはやされてゐる「アップレゲール」とやら呼ばれる類の持つ、あの煙りの様な新しさとの間には、歴史傳統と經驗などの累積の上に立つて未來を造る「力」を持つものと持たないもの、謂ひかへれば「生命」のあるものと無いものとの違ひがあるのであります。

この事だけからしましても私共の生活は、古くして然も日々あらたなものを消化しながら、常に價值ある「新しい」ものを「生み出す」ところのものを求めまして、お互様に死ぬる瞬間までも、歡喜と希望を持ち續けることの出来る眞の青年でなければならぬと云ふ事を識るのであります。

所で、この生命・内容の無い新しさ、凡そ此の位無意味なものは無いのであります。が然も何時の時代にも、大きな社會的・國家的變革のあつた後の世相には必ずと云つてもよい程、この無意味と云ふよりも害こそあれ殆ど益することの少ない「新しい」ものが横行するのであります。

現在、私共の置かれてゐる今日の中から青年層の一面を取り上げて見ましても、無批判・無反省な、得手勝手・虚榮的な盲目的我執から、自由主義・個人主義を便乗的・自己辯護的に取り入れて奔放

な生活から何時しか墮落の途を辿り、遂には不良の群が倫落の淵に落ち込んで行く哀れな悲むべき數多の青年男女があります。

これと軌を一にするものに同様の途を辿つて、何等の自覺もなく只一種の英雄主義的誇大妄想から附和雷同的に、又は單なる彌次馬的好奇心に驅られて社會の忌憚を受け、自身も又容易に拭ひ難い心身の痛手を負ふに至つて遂には自暴自棄に陥り、反社會的行爲の常習者、或る意味での時代的犠牲者となる誠に氣の毒な若者達もまた相當に在ることでありましょう。

又これ程でありませんが數的には遙かに多きを占めるものに農村青年男女の姿があります。

無爲な「新しい」ものへの憧れから農村の生活を厭つて徒らに都會的な外見のみを追ふ結果、勢ひ輕佻浮薄なものに流れて髮形・服飾・用語・行爲から引いては道徳觀に至るまで、己れを忘れた誠に賤い振舞ひに得意然とし、周圍の人からは白眼視されるばかりか反つて都會人からも擯斥され、あたかも有爲の年代を徒勞に終らし將來さへも謬るものが到る所に見受けられます。

私の知る範圍の青年諸君の内にも非常に有爲な人達が相當に居られるのでありますが、一般的のその數に於ては到底比較にならぬ程の少數でありまして、國家再建の中核體として最も重要な役割を占める青年層のこの傾向は、眞に憂慮に堪えないものがあります。

私共年配者は此の世代の當面の責任者として、今日まことに不遇の立場に置かれてゐる青年男女諸君に對して最大の理解と、最高の愛情と、無限の熱意を以て彼等の多幸な將來のために、總ゆる忍苦

と犠牲に耐え眞の青年となつて生涯を盡し、善き革囊として最も良き協力者と成らなければならぬのであります。

そして此の精進こそが其のまゝ神佛に通ずるの道であることと確信いたします。

何事にまれ 只ひたすらの精進に生きる。

法然上人の一枚起請文に諭されました「理屈や學問の上ではなく只一向に念佛せよ」との思召しも、これに通じることとを御示しになつたものと私かに拜察致されます。

いさゝか冗長に過ぎますほど述べました「古い」と「新しい」ものと「生み出す」ものととの理合ひも、此の「ひたすらに精進する」事によつて混然一體無礙の境地が自から顯現され、識らずして廣大無邊の功德の内に坐し、菩提を得て無量壽の上に生きることが出来るのでありましょう。

凡拙の致しますところ些か理屈に墮しましたことを御詫び申し上げます。

(十五頁よりつゞく)

に、それ等の溢れる町筋にいと、いかにも遠く、いかにも異つた土地へ來たとの感が沁々とする。靴も、服も進駐軍そつくりで、たゞ帽子丈けが少々ちがう。そして一番目立つのは、シャツも靴も綺麗に手入れが屆いていることだ。かつての日本軍隊のあの野暮さは全然みられない。きけば鬚も毎日ぐらゐに剃らねばならぬし、頭髮も常にととのえておくように命ぜられているとのこと。きれいに、

清潔になつたことは喜ぶべきことである。

一時危惧されたように、所謂アブレ者の寄り集まりが、アバン・ゲールの不滿組の寄り所の感は全然ない。但し、問題はこれからだから、餘りほめるのも今は早い。宿舎はつゞじが岡から一つか二つ先の驛にあるとのこととで、仲々にハイカラだそうである。町を歩いている彼等からは、少くとも今の處別にミリタリズムは感じられない。

とつぷりと暮れた町に明々と灯がつき、赤・青のネオンが郷愁を奏でる。二人の目的地はデパートの隣りのピアホールにある。旅の疲れを、しばしビールの泡に溶かし去ろうとの魂膽である。四つ角でそつちだこつちだと一、二度うろろした擧句、無事に目的地のドアを排して中に入る。秋も半ばのピアホールはさすがに人影もまばらで、旅人には反つて氣がおけずにありがたい。思えば酔興に、何百里はなれたところに來てまでも、とわれ乍らあきれつつジョッキをかたむける。

昨年は、東北大學に出ておられる神尾文蔵氏と三人だつた。そして、その席では是非一つ來年は東北でやろうじやないか、といった話がはづんだのが、その後、熱心にこの事をすすめた神尾氏の努力とそれを持ち歸つて交渉に専念されたM氏の熱意とが、今日の結果を生んだのかと思うと、去年と今年の隔りを越えて、このピアホールの雰囲気になつかしくなつて來た。

しばし懷舊にふけりつつ、M氏の長廣舌を傾聴した後、足をかえして夜の仙台の裏町を歩いて歸る。その道すがら、都會が必らず持つてゐる裏の表情も残りなく見究めて、會場についた時、懇親會は正にたけなわだつた。

阿彌陀佛

文學博士 大野法道

佛ということの起りが、釋尊であるのは言うまでもないが、釋尊のどこが佛なのかという問題がはじまる。佛教徒にあつては、信仰の第一對象が佛であるから、佛とは何かいかなるものとして佛を見るかということは、何時の時代にもつねに新しい課題としておこされ、何人も一度は考えてみなければならぬことであるに違ひない。

佛はそれを見ようとする人々の心の眼に、限りなく自由に、種々に映り出られるであらう。が、しかし先づ、經典に説かれ、古えの菩薩たちによつて教えられ、各宗の祖師方が感得された佛の意義が正しい見方であり、かつ標準となるべきであることは言うまでもない。

大乘の經典には多くの異つた佛たちが説かれている。華嚴經の盧舍那佛、阿閼佛國經の阿閼佛、淨土の三部經——無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經——の阿彌陀佛、藥師本願經の藥師如來、大日經の大日如來などは最もよく知られてい

る佛である。

昔は彌勒佛が信ぜられたこともあつたが、有名な法華經の久遠實成の釋尊は二千五百年前、印度ではじめて成佛された新佛ではなくして、實は久遠の古えに於てすでに成佛されたばかりでなく、「常に靈鷲山に在り」とも言つて、現在未來に恒存すると説かれている。

かゝる種々の佛を説くようになったのは、結局は佛に對する見方が異なるためであり、それぞれの形で佛の心が自由に映り出る姿を語るものである。

佛の三身とは

佛の意義を明らかにするために、印度の菩薩たちは三つに分けて説き出された。法身・報身・應身がそれである。法身は佛の成佛を可能ならしめる眞理である。それが如

といわれる。「如」は萬有に即する、まさに爾あるべき大自
然の理法であり、佛は「如」を證（さしあは）驗して實動し來たれる
ものであるから「如來」というのである。こゝに佛教が、
僞妄性を永離する基礎がある。眞に人を愛し、世を思う體
にもてなし、その虚に乗じて、ある種の我欲をみたそうと
する僞妄者が、その非行をばくろされて、法の裁きに包み
きれず、ついに自らの罪惡を容認するようなことは、すべ
て如に立つていなかたからである。いやしくも、人とし
て、まさに爾あるべき道に立つならば、夢にも虚偽欺瞞（きまん）の
行動に出るようなことはあり得ないことである。

「如」に立つて願を起し、行を修めて、遂に「如」をさ（さ）と
りあらわすことによつて佛格を成就した正等覺者が「報身」
である。この佛格は天然自然に成就するものではなく、必
ず願と行に因つて成るものであるから「報」というのであ
る。

報身は内外のいろいろな功德莊嚴相を備えたものとして
説かれることになつてゐるが、實は「如」が人格を通じて
動き出たことが、報身の眼目であり、成佛の事實そのこと
が三身の主體である。

世人の中には「如」の實在はわかるけれども、徳相莊嚴
をそなえた報身は信じ難いというものがあるが、之は法身
まづありて報身が可能だとする説明の順序に惑えるもので
あり、哲學的に理法のようなものを考えて、それを以て法

身と見る弊に陥つたのである。佛教では、佛格を成就した
事實が基本で、この事實をみつめるときに、法身が見出さ
れてくるのであるから、法身は解るが、報身は判らぬとは
顛倒した考へ方である。昔にも

法が先きで、それによつて佛が成就したのであるならば
法・佛の順序であるべきに、何故に佛法というか
という問題を出して、

法は地中に埋没してゐる寶の如くで、何人もこれあるを
知らなかつた。然るに、佛がそれを掘り當て、明らかに
なつたので、法の前に佛を置くべきである。

と、解決したことがあつたが、「如」の人格的活動が、佛の
佛たる所以で、それを報身と言うのである。

應身は、佛の教化力の方面である。佛は教化さるべき衆
生の身心に、應同可と見る所からこの名が出たのである。
昔の所説では、佛が成就した斷惑證理の榮光に輝くを報身
とし、報身から教化身を放射して衆生を救うとする。それ
がために報身は高妙であるが、應身はそれより一段低いと
考えるようになり、甚しきにいたつては、凡夫や菩薩の下
位の者は應身が教化し、高位の菩薩は報身が教化すると言
うようになつたが、これらは全て報身を自利のみに限つ
た誤りから導かれたのである。如の人格活動が報身である
からには、そこに教化力の具わらぬ筈はないのであるから
實は報身に一切の自利々他の功德が含有されてゐるのであ

るが、佛の意義を分解して、説く企てから、佛の功德中、とくに教化の方面を別にひきはなして應身としたものと解すべきである。

かくて佛に三身ありとする古來の解釋にあつては、報身が中心であり主體であつて、佛格の基本として法身が見出され、佛格の教化力を顯わそうとして應身が説かれたのであり、何れも佛の意義を明らかにしようとする説明から出たもので、實は三身は一體のものなのである。

本願成就身

如の人格的活動が、佛格の中心であることは、既に述べたが、その成就されたるものの内容について、また種々の見方がある。

大體は智慧と慈悲とにおさめられる。何の錯誤もない無漏智と、廣く衆生を熱愛する大慈悲とであるが、特に衆生を思う深刻熾烈なる願の成就として佛格を見直すところに阿彌陀佛の出現がある。

阿彌陀佛は、終始去來、まつたく願の佛である。その菩薩道を踏み出した第一步に於て

吾れ誓う。佛を得るまで普くこの願を行じて一切の恐懼おそれのために大安を作さん

と、ひたすら衆生を思う立願の意圖を告げらるゝに始まり

人間に直接する淨土の條件としての四十八願が選擇され、剛健不ちやう卻の行の精進によつて、遂にこの願を成就されたのであるが、この願こそはこの佛の生命であり、この佛ある所以である。故にとくに之を本願というのである。

本願の成就是、願が佛の攝取の力として、實動に移つたことをいうのである。すべて願に立誓されている事項が、衆生に向つて行使されている間は、攝取力の實動に間斷なく、世に衆生の絶えざる限り、願の活躍は永遠につゞけられているのである。

本願成就身として佛を見守ることは、佛は人間よりかけ離れた存在ではなくして、わが子を忘れぬ親心のようになつかしく、佛はわが身を擁護し、指導し、激勵する力であるとの感受から來るのである。

光明攝取身

本願成就が示す佛のなつかしさから、更にまた明るい世界へ連れて來られた喜びに満つる心になるものが、阿彌陀佛にある。光明攝取身というのがそれである。この佛の願の中に光明無量の一條があるばかりでなく、無量光佛、無邊光佛、無礙光佛、無對光佛、饒王光佛、清淨光佛、歡喜光佛、智慧光佛、不斷光佛、難思光佛、無稱光佛、超日月光佛とも言い、この光明が衆生に働きかけては、睨にら争、沈

滯憂悶行詰りなど、あらゆる暗黒の不安を光化して、人をして觸光桑軟のうるほひを得しめ、安泰として取るべき進路の開き出さるゝ照益ありと説かれている。

明るい世界のことは、華嚴經の古いものに、釋尊の成道の際に開きだされた世界は、初めて佛を得たるとき、光景はなほだ明かなりと記されている。

このように、佛の所在には、一切の冀妄はあとかたもなく消え失せて、たゞ浩々朗々とした清英の氣にみちみちてゐる寂光の淨土といふ、その蓮華の青色には青光あり、黄色に黃光ありなどと言うのは、この心から來るのである。

光はまた、佛に具わると見られる。それも始めは、佛の身の周圍一尋ほどは、光明があつて明るいと見られ、それから或は頭背に圓光を拜し、或は白毫から光明が放たれると信じ、或は口から毛孔からなどゝ言われ、遂には八萬四千種乃至無量の光明ありとして知られるようになった。然るに阿彌陀佛は、たゞその限りなき光りに、自ら輝かるゝのみでなく、光りを以て衆生を照護せらるゝ佛である。人の世に、國に、家庭に、身の上に、光りを投げ與えて、そこに蟠居する一切の闇黒を光明化せねば止まない佛である。かくして阿彌陀佛を仰ぐと、きつねに光りを身に受けて、すべてたじろぎを究破しつゝ、生々たる前途を見ひらく心に勇むであらう。

來迎引接身

阿彌陀佛がまた、來迎引接身として告げらるゝことも、同じように、人の心に明るさを與える一つの姿であらねばならぬ。

いづれ人の世は旅であるから、日々の勤めにいそしみ勵んで、一步一步をふみしめてゆく楽しさは、得も言われぬものがある。しかし人生の旅には、萌え出づる若葉の緑、或は春の曙、清光の大氣は澄みきつて目を喜ばす紅葉の秋の日ばかりあるものではなく、炎熱灼く如き眞夏の午後もあれば、凍寒肌をさす冬の夜にも出あうのである。愉悅と悲愁、順調と逆境思う通りに事の運ぶこともあれば、豫期せぬ失敗に戰くこともありなどして、錯綜盡くる所を知らぬが、それら個々の事實を一括して、ついに人生は何處へゆくのであらう。

人生はどこへ行くという問題は、理論であつて解けるものではない。たゞ佛の來迎引接のみが、之を解決する唯一の鍵であらねばならぬ。旅の行方は佛の溫い懷であると、腹をすえた落着きが、日々の歩みにどれほどの明朗を加えるかは、けだし思ひ半ばに過ぎるものがある。

諸教の讚する所、多く彌陀にあり

と古人が言ひ放つたように、佛教の隨所に説き出される佛

は、阿彌陀佛であるが、それは全く如上の人生に即し、人の本心に契同^{けいどう}してひし／＼と胸を打つ力ある佛だからである。

「阿彌陀佛は人の世に縁ふかし」とされるのも亦この心によるのである。

願力を感受する直路

法然上人の阿彌陀佛の信仰は、百尺竿頭一步を進めて、更に一層徹底した佛である。

上人にあつては、もはや阿彌陀佛はわが身から離れた存在ではなくして、現に今、佛に攝取されているわが身を見出されたのであつた。

阿彌陀佛を言葉の説明や、文字の書き綴りや、思想意義の考察で以てあらわしている間は、わが身から遊離した餘^よ所のものゝ如くであるだけで、この佛の願力の實動を感受するに、或る空隙のへだ／＼りを餘儀なくされている。この佛を理解するには、そうした方法も、あながち無用ではないけれども、然もこゝに、完全にこの佛に觸れうる極めて簡単な道がある。念佛がそれである。たゞ佛名をよぶその聲で、はやわが身に即する佛力を受得することができるのは、まさに一つの大きな驚異であらねばならぬ。

阿彌陀佛に於てのみ、かゝる直路が開かれていることが

こよなく尊く、また嬉しくも身に沁みた法然上人であつた。さればこそ、

妄念餘念をも顧みず、散亂不淨をいはずたゞ口に名號を唱へよ。もしよく稱名すれば、佛名の徳として、妄念自ら止み、散亂自ら靜まり、三業自ら調ひて、願心おのづから發^はるなり。

然れば願生の心の少きにも南無阿彌陀佛、

散亂の増す時も南無阿彌陀佛

妄念の起る時も南無阿彌陀佛

善心の起る時も南無阿彌陀佛

不淨のときも、南無阿彌陀佛

清淨のときも、南無阿彌陀佛

三心のかけたる時も南無阿彌陀佛

三心具足するにも南無阿彌陀佛

三心現起するにも南無阿彌陀佛

三心成就するにも南無阿彌陀佛

これ即ち決定往生の方便なり。心腑におさめて忘るゝことなかれ

と教えられたのである。

あらゆる時と處と場合に於て、念佛は、現に今、佛に攝取されているわが身を見出すに、何ものゝ追隨をも許さぬ唯一の手が／＼りである。之が心腑にふかく納めらるゝ所に阿彌陀佛の信仰は徹到するのである。

浄土の會員を

一人でも多く

◇どなたでも會員になれます。

◇會費は半年一三八圓、年額二七六圓です。

◇會員には毎月「浄土」を配布します。

◇この會はみなさまの會ですからその發展のために、お一人でも多くの會員をつくつて、正しい信仰運動をひろめませう。お知合の方々にぜひおすすめ下さい。

◇お申込には振替（東京八二二八七番）を御利用下さい。

芝園だより

◇大正大學の演劇部の學生諸君が秋の記念祭に上演するのに一幕物を選んでくれと言つてきた。しかも女の部員がいないし、舞臺裝置は極度に制約されているし、いろんな點を考えると、仲々そう適當なのがない。いくつかの作品をそれでも選んだ中に、私は芥川龍之介の「青年と死」を加へておいた。

それは死を面前に据えることに依つて眞に生きることと語つてゐるからである。しかしこのようにして生きるということは最も苦しい道でもある。

◇夏目漱石は伊豆修善寺の大患で文字通り死線を越えた。彼の「思ひ出すことなど」を讀むと、そこでは生死の問題が重大な關心事となつて居り、死に當面した漱石はそのため生に價值を痛感して、天に感謝する心を起している。また死に直面する不幸に陥つたために、平常はそれ程にしない人たち

も、親切を盡してくれるのを見て深い感謝の情を抱いている。彼はこの大患を越えたとともに、煩雜な人間社會から離れ、純一な精神生活の光に浴するに至つたと言える。その後の彼の作品は、そうした方向を語つてゐる。

◇死を面前に据えて生きることの苦しみ、人生は苦であるという言葉、これは實に怖ろしい眞理である。私はこの編集後記を、錯亂にたえつゝ記している。私は二女の枕許でこれを書いている。そして一字から一字へ書きつゞけることが、一刻から一刻へと刻んでゆくことが、私と子供との今生での別れへの道なのである。醫者の誤診か、或は餘程の偶然でも起らぬ限り、私の子供の生命はもう一月とはない。この浄土が刷り上るとき子供はこの世から消えて行つていくかも知れない。堪え難いことである。その時には私はペンを執ることも出来ないだろう。個人的なことをこゝに書くのは以ての外か

も知れないが、私は誰かに、たゞ叫びたくなる。生きてゆくということとは、堪え忍んでゆくということとの他に何もない。（藤田）

入會購讀御希望の方へ

會費半年金百三十八圓を、便利で安全な振替で御送金下されば、着次第御送本申上げます。

「浄土」十一月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿六年十月廿五日印刷
昭和廿六年十一月一日發行

（定價貳拾圓）

編輯兼發行人 眞野正順

印刷人 春山治部左衛門

東京都千代田區神田保町三ノ十

印刷所 共立社印刷所

東京都港區芝公園五ノ一〇

發行所 法然上人鑽仰會

振替東京八二二八七番
會員番號B一〇八〇一四

會費半年金百三十八圓（送料共）

信仰を求めめる人 必讀の書
宗教を知らんとする人

現代人の混迷せる意識にはつきりと
方向を與える

大正大學助教授

竹中 信 常著

宗教への思慕

現代人の宗教概論

価百二十円 送三十円

A5版百頁 鮮明騰寫

暗澹たる人生行路に輝かしい信仰の
燈火を點する

社會科教師用テキストとして最適

殘部僅少につき本月一杯にて申込べ切

申込所 東京都港区芝公園五の十

法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番

淨土トラクト既刊

心の糧となる内容、親しみ易い文章、雅味のある装釘、そして誰もが氣輕に手にできる廉價——淨土トラクトは各方面に好評をもつて迎えられています。

お十夜の話 藤田寛雅著 賣 切

お彼岸の話 竹中信常著 四圓送六圓

お盆とおせがき 佐藤密雄著 四圓送六圓

文書傳道は現代的要求です。讀むことによつて信仰の歩みを進めてゆく上に、また生活文化としての佛教への常識、教養をたかめる上にも、最適の良書、施本等に御活用下さい。必ず良き心のみのりが得られます。

法然上人鑽仰會